

大阪の子ども施策を考える市民研究部会 スタートアップセミナー

子どもも、保護者も、先生も、タイヘン!!

～ 知ってほしい、大阪の学校現場の「いま」 ～



2021年6月27日(日) 14:00~16:00

久保 敬さん(大阪市立木川南小学校長)

はじめに

皆さん、こんにちは。木川南小学校の久保でございます。今日はこういう機会を作っていただいております。僕は話があんまり上手じゃないので、校長になってから月曜日の児童朝会が苦痛で、面白くない話してるので、できるだけ2分以内ぐらいで終わるようにしてるんですけど、今日は60分お時間いただきましたので、少しお話聞いて頂けたらというふうに思います。

5月17日付で、大阪松井市長宛に、「提言書」を郵送で送りました。ただ、その文章が市役所に着くよりも早くっていうんですかね、3人ほどの知り合いの方に送ったのが先にネット上でバーツと広がって、それが逆に教育委員会の方にも伝わったんです。

1. 「提言書」を出すに至った経緯

1-1 オンライン授業の試行時点で浮き彫りとなった課題

「提言書」を出すに至った経緯をお話しさせてもらおうと思います。発端は、4月19日(月)にテレビで松井市長が、全面原則オンライン授業にすることを言われたらしくて、それを見た保護者が学校に「ホンマですか？」って電話してこられたところから始まります。でも、今までにもこういうことがたくさんあったので、「いやいや、学校は何にも聞いてないんです」「またそのうち教育委員会から正式な通知文があると思いますから、またわかったらお知らせします」ってということで、その時は終わったんですけど、やっぱり保護者の方は「オンライン授業でできるかな」ってというのが…。

うちの学校は、GIGA スクール構想の1人1台端末が、1月の中頃ぐらいに配備されたんです。それから2月の中頃には一回オンラインで双方向通信してみようということで、土曜授業にやってみたんですけども。まずは、僕のところは淀川区なんで Chromebook っていう、今まで windows 使ってたので違うシステムが入っても子どもも教員もすごい最初戸惑ったところから始まって。なおかつ今もそうなんですけども、通信回線が非常に脆弱で、学校で練習しようにも練習できないというか、初期設定をしようと思っても、30人のクラスで1時間のあいだに5台ぐらいしか繋がらなかったみたいなことが重なって、なかなかその辺が進まないってということもありました。

そんなことを教育委員会にも言ってたんですけど、「これからサーバー少し増強していくんです」みたいな返答でなかなか改善されなくて。あとはやはり、Wi-Fi 環境のない家に学校から Wi-Fi ルーターを貸し出すっていうんですけど、それも割り当てられた台数では足りなくて、貸してくれて言ったんですけども、(教育委員会からは)「もう予備はない」と。

土曜授業でしたので、近隣の学校からお借りして、その時はいけたんですけども、やはり僕らも初めてでしたし、使ってみるとやっぱり「繋がらない」という電話がいっぱいかかってきて、「どうしたらいいんや」とか。特に低学年は、自分ではやっぱりできないので、親御さんがよくわかってる人だったら問題ないんですけど、それでもなかったらどうしたらいいかわからなくなってたくさん電話があったり。やっと繋がったと思ったら今度やっぱり音声聞きづらいとか、途切れ途切れになるとか、画像もすごいタイムラグがあってすごく見づらいとかいうことがあって、動画はほとんど見れなかったというお家もたくさんあったり。できることとできないことがその時かなりはっきりしたというか、授業としてやるにはかなりハードルが高いなあっていうのは思ったんです。みんなが顔を見てお互い「うん、元気？」とか、「土曜日何してる？」とか言って、自分のぬいぐるみとか持ってきてね、そうやってふざけあってるのを見てると、コミュニケーションツールとしてはいいもんだなと思ったんですけども、授業としては非常に難しかったというところがあります。

その時も、後で保護者アンケートを取らせてもらおうと、きょうだい 3 人いるお家とかだと「ケンカになりました」「一人ずつ別々にあればいいんでしょうけど」みたいな声があって、毎日オンライン授業になったらずっとケンカになって大変やんみたいな、そんなことも考えてなかったなって。ちゃんとヘッドセットもついててとかいうふうな機材の整備とかも必要やろうし、先生の授業用パソコンのウェブカメラもすごく性能が低くて、ちょっと離れて「黒板見えますか」とか言ったらやっぱ「黒板の字はぼやけて見えません」とかいうようなことがあったりで、一回やってみたからこそ難しいということがよくわかって。その時(4月19日の松井市長の記者発表時)お電話くださった保護者の方も、オンライン授業、2月のあのレベルでは授業にならへんでしょっていう気持ちもあったんやと思います。それと、家に子どもがずっといる状況になるとやっぱり親は仕事を休めないっていうのもあって、お電話があったんやと思います。

1-2 学校・保護者・子どもの実情が行政に届かない

これはちょっとまずいなって。(オンライン授業を)全市展開するっていてもかなり難しいかなと思って。ただ、教育委員会に言っても、「今ちょっと検討中です」みたいなことしか返事が来ないので。今までにももうこういう、テレビで知って、後から教育委員会がそれに合わせて通知してくるってことが度々あったので、これは言った人(=市長)に直接言えへんかったら意味がないかなってようなことも思ってまして、その時は大阪市のホームページから「市民の声」というメールで意見を言うシステムがあるのを思い出しまして、自分の名前とかも明らかにして、市長への質問として、これちょっと難しいんじゃないですか、オンライン授業やってみた感じでこういうところが課題で、これ全市展開っていうのが多分難しいです、みたいなことをメールで送ったんです。それについては僕の学校の担当の指導主事の人から「メール見ました」「お気持ちはわかりますけどなかなかちょっと今どうこうすぐにお答えできるようなことはありません」みたいな返事があったんです。

21日(水)には、教育委員会の方からまだ正式な通知は来てなかったんですけど、一応、全

面オンライン授業というのは難しいとわかったんでしょうか、オンラインまたはプリント学習みたいな話が出てきて、絶対オンラインじゃなくてプリント学習でもいいですよって。ただし、オンライン授業しようと思ったら家にいないとあかんっていうことが出てくるので、1・2時限目は家庭でオンラインかプリント学習、3時限目ぐらいに登校して、4時限目に学習内容のチェックをして、給食を食べて、その後帰宅してまた家でオンラインかプリント学習みたいな、ちょっとややこしいスケジュールが教育委員会から標準として示されるっていうことがわかったんです。給食についても、子どもの食の保障について意見が出て、こういうことになったんやろうなあと。でも給食をみんなで食べるのが一番感染のリスクが高いついていうことでもあるから、いったいこれは何がしたいのかな？ っていうのはすごく思って。

うちなんかとくに小っちゃな学校なんですけども、毎朝の集団登校で1年から6年まで、近くの子たちが一緒になって登校しているんですね。その時間帯は、地域の人の見守り隊もあってしっかり見守ってくださって、みんな非常に安全に登校できているので、これを崩したくないなっていうのがあったんですね。1・2時限目は家庭学習だけれども、なかなかそうならへん家庭のお子さんについては学校で監護しますよっていうのもセットになってたので、そうすると登校時間がバラバラになる。一人ポツンと低学年の子が10時半ぐらいに歩いてくるっていうのはちょっと心配だなあっていうのもあって、うちの学校は、結果的には教育委員会の言うことをちょっと無視している形になるんですけども、1時限目から今までどおり集団登校して、4時間学習して、給食食べて帰りますという方針で保護者の方には通知しようって決めたんですね。

教育委員会の正式な文書が来たのが22日(木)だったんで、その日に保護者に、うちはこうしようと思ってるんですけどそれでいいですか、みたいなアンケートを取ってから決めようと思ったんですけども、22日(木)にそういう手紙を出すことができなかったんで、週明け26日(月)からは緊急事態宣言の措置になってしまうので、もう23日(金)に今後はこういう対応をしますと言い切る形で方針を出して、26日(月)にこういう対応にしたけどどう思いますか、とアンケートを保護者に取りました。保護者のアンケート結果では、それでいいと思うという意見がほとんどで、一家庭だけ反対があったんですけど、「どうせなら臨時休校にすべきぐらいのことなんじゃないか」っていうふうな、中途半端に、朝から来ようが3時間目から来ようが給食を食べて帰るっていうこと自体がどうなんやろっていう声でした。ただ、1時間目から学校に来るっていうことには賛成だけでも、自由記述のところでは「これってやっぱりおとなの都合ですよ」「自分が仕事休めたら子ども見ることもできるのに」「変異株は子どもにも感染しやすいって言って、身近な学校でも休校になったと聞くと、親としてはありがたいけれども、本当にこれは子どものためになってるっていったらそうじゃない部分もある」、やっぱりおとなの問題として考えなあかんということを真剣に考えてくださる方もおられて、ありがたいなと思いました。

結局、緊急事態宣言が延びてもこの措置を続けると市長がまた言われたので、これについてなんとか僕も考え直してほしいと思って、また「市民の声」のメールで、1時限目から来ることと3時限目から来ることのリスクっていうことを考えたときに、結局、学びの保障できないこととか、交通安全の保証ができないこととか、いろんな問題があるから、総合的に考えたら1時限目から来て午前中授業のほうがいいんじゃないか、給食も食べずに帰るとか、以前に分散登校もや

ってたので、簡易給食の形にして、何か食べるのでも簡単に食べれるとか、みんなで食べるのがリスクなら持って帰ることもできるんじゃないとか、いっそのこと臨時休校もありじゃないとか意見を送ったんですけども、これまでのやり方を継続するっていうようなことで。

そう言ってるうちに、今度は5月14日(金)ぐらいですかね、また保護者から電話かかってきて、「なんか夏休み短くなるって市長が言ってるんですけど本当ですか？」みたいなのが来て、「いやそれも聞いてません」って。ただなんか、学びの保障のためにはまあやむなしっていうことやったっていう。

1-3 おとなの判断に振り回される子どもたちを前にして一念発起

それ聞いて、僕はすごく、なんて言うんですかね…ちょっと悲しいというか、子どもたちはすごい健気にね、色々感染予防対策で、自分たちのためだけじゃなくやっぱりコロナが収まらなければいつまでも自分たちも安心して勉強もできないし、一生懸命感染対策はせなあかんと思うんで。それでもやっぱり臨時休校になるならその時には仕方ないと。でもやっぱり去年のことがあるので、学校が長期休みになるっていうのは、子どもたちはすごく嫌だなど、友だちに会えないとか、生活がすごく不規則になってしまって去年の休校明けに苦労したとか、そういう感じを持っている子たちもいて。夏休み短くするって言うんやったら、今のやり方を変えて、ちゃんと子どもたちが学習できるようにしてほしいなあというふうに思ったんです。

結局は、オンライン授業をしてもそれは(正規の)授業として認められへんっていうことを文科省から言われて後からわかったとか、家庭学習なんぼやってもそれは実数としてカウントできへん。そんな状況を作っておいて、学びの保障のために夏休み短くするっていったら、子どもたちがほんまになんか…なんでしよう…子どもたちがほんまにやる気をなくしてしまうなって。今でも頑張ってる、夏休みだけは短くせんといってくれていう、子どものアンケート取ったら(意見が)いっぱいあったんですよ。「もうこんだけがんばってるのに夏休みぐらいゆっくりしたい」とか、「これで学校あるって言われたらもう許さん!」とか書いてる子もいて、そういう気持ちが伝わってへんやろなって。

だから、その子どもたちの言葉も入れて、また(「市民の声」の)メール3通目を送ったんですけども、もうなんかその時に、最初はオンラインの授業のことだけを何とかしてほしいっていうのがもともとやったんですけども、いろんなことを思い返してきた時に、僕自身、これはどうなんやろうと。そのことだけがうまくいって1時限目から子どもが来れるようになったらそれでいいのかと思った時に、決してそういう問題じゃないなっていう気持ちがあって、よし、これは手紙(=提言書)を送ろうっていうことを思ったんです。

もちろんそれがほんまに(市長の手元に)着くかどうかも分かってへん(笑)、僕自身もなんか半信半疑やって、ただまあ僕の気持ちとして、やっぱりちゃんと思ったことをはっきり言おうみたいなことで、手紙を出すという行為になったので。で、誰かに証人になってもらわなかったら結局は(市長の手元に)着いたか着けへんかもわからへんし、僕だけの中で終わってしまったらと思って、今までにもメールを送るたびに、退職した3人ぐらいの人(元教員)に、僕こんなメール

を送ったから、皆さんももう退職してヒマでしようと、友達誘って同じようなメールを「市民の声」で送るとか、教育委員会に電話して、うちの孫がこんなんで…って言ってくださいよ、とか言ってたんですよ。それと同じぐらいのつもりで、僕こんな手紙出したからって言うたらまた応援してくれるかなとか、確かに僕は手紙を出したという証人になってもらおうみたいな、そんなつもりで出したものが、その人たちが、これすごいいい文章って褒めてくれはりました(笑)、みんなの気持ち詰まってるとか言ってね、友達にこれ見せるわとか言ってくれたら、その友達も友達に見せたいって言ってんねんけどって、その方々がまた律義な人で、友だちの友だちも言うてんねんけどって、もうしょっちゅう連絡くれるので(笑)、これが続くと困るなと思って、皆さんの信頼できる方で共感してくれる人がいてはるんやったら、本人が良いって言ってますよって伝言したら、いつの間にかいろんなところに載ってたりしたみたいです。

5月18日(火)ぐらいにはメディアの方から連絡があって、話を聞きたいということになったんで、本当にその人たちに(提言書を)渡したのが5月16日(日)の午後も夕方前ぐらいやったので、一気に一日半とかぐらいの期間ですごい拡散したんだなって思ってます。まあ、それが軽率な行為やったって、市教委には言われてるんですけども(笑)。

2. 教員としての歩みと「提言書」

2-1 解放教育との出会い

なぜ僕がそういう「提言書」を出そうと思ったかっていうのも、一連の今言ったような発端はそうだったんですけど、きっと僕の教員としての歩みに関係していると思います。

僕自身は1985年に採用になって、今年度で定年退職を迎えるんですけども、同和教育推進校の大阪市立啓発小学校に最初赴任しました。僕自身は同和教育とか、自分自身がちゃんと受けてきたこともなくて、受験戦争の中で、僕自身が1点2点を気にして、それで自分の価値を決めているような人間でした。だから自分より点が上の人には卑屈なすごい劣等感を持ってて、自分より下やと、すごいなんか変な優越感っていうんですかね、傲慢なことを思って。教員になったときも、僕は大阪教育大学出てるんですけど、教育大出てんねんから、いっばし通用するやろうって勝手に思ってたんですよ。大阪の教員の世界でいうとエリートに入るの。

で、(赴任校に)行ったら、そんなものでは通用しないということはもうわかったんです。本当に教師の仮面みたいなことで、自分の思ってた「教師」なんかの顔で子どもたちに対応しても全然通用しないって。本当になんか丸裸の自分が問われるっていうか。その時に僕はなんにも力持っていないなあっていうことをすごく感じて。むしろ子どもたちの方が、厳しい生活の中ですごい人間鍛えられて生きている子たちを目の前にして、僕って何をここまで学んできたんやろうっていうふうに思うような。だから、ありのままの自分に向き合う——本当に偶然その学校に行っただけなんですけれども——自分にとっては本当に人生の変わり目っていうか、自分を変えてくれた、

それとともにやっぱり「生きることの意味」っていうのをしっかり考えるようになりました。

部落の子もいて、在日韓国・朝鮮人の子もいて、それから障害のある子も原学級保障ということで一緒にクラスの中に入れて。僕も今まで自分の経験の中で障害のある仲間と一緒に学んできたっていう経験がないので、初めてそこで障害のある子たちと一緒に暮らすっていうんですかね、生活していく中でたくさんのことを学ぶことができたなあっていうふうに思っています。その頃やっぱり「共に学び、共に育ち、共に生きる」「誰ひとり絶対置いてきぼりにしない」みたいなことが学校とか地域、それから保護者とも共有できていた、そういう学校やったなと思います。だからそこで最初に教員としてスタートしたのは、すごく大きなことやっていうふうに思っています。

2-2 人権教育の推進をとおして学校外の様々な人と出会う

1999年から2004年に地域人権教育推進委員会で、僕は北区・淀川区・東淀川区の学校を担当していて、小・中・高の学校の先生たちに人権に関わる研修を提供したり、あるいは何か人権教育の実践に取り組まれる時にはお手伝いさせてもらうということで、学級担任は持たずに、当時は淀川区の神津小学校に事務局があったんですけど、神津小学校の教員というよりも、その3区の人権教育の仕事をしていました。

その時に、学校以外の様々な方と研修を企画する中で出会うことがたくさんありまして、カンボジアにスタディーツアーにも行かせてもらったり、今もそうなんですけど、水俣病の患者さんの会と交流持たせてもらったりとか、阪神淡路大震災の(被災者の)支援をされているNPO法人の方と知り合いになってずっとモニメントウォークに参加させていただいたり、この時にいろんな学校以外の方と知り合わせていただいて、その中で多様な視点で見るとか——決して教員は常識ないとかそんなふうに僕は全然思っていないんですけど、やっぱり思い込んでるっていうか、その世界だけで、多面的に見ないがためになんか思い込んで、良かれと思ってやることがそうじゃなかったりすることがあるっていうようなこととか——そんなことにたくさん気づかせていただいたと思うんです。

そういう経験があって、その後も、大阪市教育センターで指導主事もやってるんですけども、人権研修に携わらせてもらったり、こういう経験が「提言書」を書くことにつながった僕の教員としての歩みの大きな部分かなっていうふうに思っています。

2-3 「提言書」は自分自身への怒りの表明であり立場宣言である

僕自身はすごく大阪の教育に育てていただいて、誇りにも思ってたし、誰ひとり取りこぼさないっていうか、置いてきぼりにしない、多様な人が一緒になってみんな生きていくんだっていうことをしっかり教えてもらって、そのことにすごく誇りも持ってたはずなのに、気がついたら公教育の状況もだし、自分自身もなんか変わってしまってたんだなって思ったんです。

そのうち政治の流れが変わったらとか、こんな時代はそう続かへんとか、21世紀は人権の世紀やって言われてるから絶対なんか変わるんやとかね、根拠もない、自分が当事者じゃなく、ど

っかに期待、他力本願で、そのうちきっと変わるだろうみたいな。時代の風はいつまでもこんなじゃないとか、そんなんで自分を納得させて、黙ってもう現状を見ずに追従してきたっていうんですかね、思考停止してた部分があると思うんです。考えると自分の中で価値観が引き裂かれていって、特に管理職になってから、余計にいろんなことが降りてきて、それを学校現場に上手に降ろしていくっていうのが「管理職のマネジメント力」として求められて、そんな中で自分が考えないようにしてきた。その自分への怒りがこの「提言書」の根本にあったかなというふうに思います。

だから、市長に何か言いたいとか、変えてほしいとかいうことよりも、あの「提言書」の中にも具体的にどうして欲しいなんて何も僕も書いてないなって。だから、自分が許せない。なんかもう、このままこれで退職してしまったら、今までお世話になった子どもたち、保護者、地域の人たちを裏切ることになるっていうんですか。僕も決して、ええ教師じゃなかったと思うので、たくさん子どもたちを傷つけたりしながら、それで子どもたちにいろいろ教えてもらって、なんとかこの37年間、教師として務まってきたなど。その時の子たちには(恩を)返せないとしたら、これから僕がどういう教師になっていくかということ返してきたはずなのに、もうこのまま定年退職して——定年退職してフリーになったらいっぱい文句言たろうと思ってたんですけども——そういう卑怯な自分でいいのかっていう、そういう気持ち、自分への怒りですかね、それがあの「提言」。だから「提言」というよりもなんか、自分への、もう一回原点に立ち戻るぞっていう宣言、自分への宣言やったような気がします、今思うと。

3. 変わったのは子どもではなく子どもを取り巻く環境

3-1 子どもの世界が奪われてきた

僕自身は37年、子どもの本質は変わってないというふうに思ってるんです。ただ、変わったのはやっぱり、子どもを取り巻く環境だなあって、その環境を変えてきた責任は自分にもある。さっき言うたように、自分が本当に当事者っていうんですかね、主権者として物事をちゃんと考えられてきたかなっていうことがあって、すごい子どもの世界は変わっていったなど。

子どもの世界が奪われてきたなっていうのはずっと思ってたんですよ。遊ぶ場所がまずないですし。僕は1年生を1996年ぐらいに一回持ったんですけど、そのくらいに生活科っていう科目ができたんですけども、虫の捕まえ方を子どもに教えるっていうんですかね、まず虫がどこにいてるか、草原みたいなのところもないので、そんな場所を探すところから始めて、バッタを捕まえるのに捕まえ方みたいなもの言うてる時に、これを学校でせなあかんようになったっていうのはどういうことなんかなって。こんなん、ほんまは誰でも当たり前体験してたことちゃうかなとか思ったり。

それから遊びもすごい商品化されてきて、ファミコンとか、もうこの頃にはたまごっちとか、ポケ

モンが出てきて、1年の子でもいっぱい持ってたんですけども、ある時、任天堂の偉い人が言ってるのを見たら、究極の遊び道具を開発しようとしたんやと、それは何かというと、一人で遊べる道具、これが究極の遊び道具やっていうふうに関係しているというのを聞いた時に、いやあ、遊びはもう商品となって、結局なんなんだろうって。それで遊んだところで子どもたちのよりよい成長につながるのかなって思ったことがあります。

なんかその頃から、消費者として子どもを見てるなっていうふうには、子どもの世界がもう、おとなの世界といっしょになってるっていうか。経済至上主義がそうさせているのかなと思ったんですけど、自分の子どもが小っちゃい時に、マクドナルドに行った時に、たぶん高学年ぐらいの集団が、ちょっとヤンチャそうな子たちがワーッと来てて、一人の子がパッと1万円札出してなんか買ってるんですね。奢ったのかちょっとわからないんですけども、僕が子どもの時やったら、500円札持って行ったら、お菓子屋のおばちゃんも売ってくれなかったんですね。いつも10円、20円しか持って行けへん僕が500円持ってきたら、「この500円はどうしたんや」ってしつこく聞かれて、で、その後1円玉いっぱい持って行ったら——これも母親が1円玉いっぱい貯金してるの勝手にくすねて持って行ったんですけど——大きいお金で売ってくれへんかったから、小さいお金やったらいいやろと思ったら、ちゃんとおばちゃんも、1円玉をようさん持ってくるっていうのはそういうことやって見てたんか、その時もえらい追及されたんですよ。その時、マクドナルドの店員さんは決まり文句で「ポテトもいかがですか」とか言って、1万円持ってて自分一人で食べられへんぐらいの量を注文してるのになおかつ、ポテトとか何とかいかがですかとか、マニュアル通りに対応している時に、やっぱり子どもを子どもとして見ていないというか。

僕の子どもの時にも、子どもやから関係ないとか言われたこともありますけれども、逆に言ったら、もう分かってて、子ども同士で解決できるやろうなっていうことをいっぱい放ったらかしにして、見て見ぬふりしてたところもいっぱいあったような気がするんです。僕が教師になって、僕が小学生の時についたウソなんて、全部先生にバレとったよなって思うようなことがいっぱいあるんですよ。でも先生は何も言わんと、自分らで解決しろみたいな感じで見ていたんだと思うんです。そういう意味で、子どもの世界がなくなっていったなと、すごく感じています。

3-2 「ゆとり教育」がゆとりを奪っていった矛盾

「ゆとり教育」で「総合的な学習の時間」ができたんですけども、この頃から完全週5日制と相まって、今まで土曜日があって6日間でやってたものが5日間になったので、毎日の時間割は数が増えたんですね。今までなら5時限目ぐらいで終わってたのが、高学年になったら毎日6時限になるみたいなことになって。その時にやっぱり教職員がすごく忙しくなったなあっていうふうに思います。子どもたちも、土曜日休みになったのは、もっと多様な体験をしてとか、学校の勉強だけじゃなくてっていう、文科省からの通達ではなあって、子どもたちに（土曜日に）どんなことをしましたかとか、最初はアンケートもとってたと思うんです。そうなった時に、それができる家庭とそうじゃないところがあって、明らかに月曜日に顔色が悪い子たちが増えたなって思うんです。

結局、お家の方は忙しいし、子どもは土曜日にまだ学校行ってたらみんなでワーワーできてたのに、時間持て余して生活不規則になる、ゲームしてるとか、起きんとだらだらしてるとか、そんなことになって、月曜日に不機嫌っていうんですか、しんどい子たちが増えたなあって。ある程度ゆとりがあってそういういろんな体験せなあかんって思ったお家も、はじめのうちはできたと思うんですけども、そのうちそんなこともできなくなって、ある程度経済的に豊かなお家の子どもたちも習い事に行くみたいなことになって、本当にみんなが月曜日しんどそうになったなあって。

僕たち教職員も、5日間で授業を終わらせなあかんということですからすごくしんどくなった。それと、土曜日に教職員でけっこう同僚性を高めてたんですよね。一緒にお昼ごはん食べて、土曜日の昼からいろんな教材研究とか、一人で準備するのは大変やけど同じ学年で一緒にやれば3回使える、3クラスで使えるみたいなものを一緒に作るとかいうことができてたのが、そういうことがなくなって、僕らも仲間意識を喪失して、もう自分のことで精一杯、他人のことに関わり合えないとか、そこへちようど人事評価制度が加わってきて、個人の能力で測られるようになってくるから、先生たちも分断されていくということが起こっていたんじゃないかなと思っています。

3-3 教育基本法改悪——政治主導の公教育への転換点

2006年に教育基本法が改悪されて、僕はこの時、そんなに危機感を感じてなかったと思うんです。今は、すごくこれ大きいことやなって、なんとかせなあかんなんて思ってるんですけども、教育振興基本計画を政府が作って、そのあと都道府県が作って、またそれを今度市町村が作って、首長が主体になって施策を作っていくようになったところで、すごい政治主導の教育になっていったんやろうなというふうに思っています。

旧教育基本法では、教育行政の役割としてこんなふう書いてあったんです。「教育は不当な支配に服することなく国民全体に対し直接の責任を持って行われるべきもの」「教育の目的を遂行するために必要な諸条件の整備確立を目標として行わなければならない」ということで、教育内容に教育行政は口を出してはいけない、責任は国民全体に対して直接負っているという書き方になってたんですが、新しい教育基本法では第16条で「この法律及びほかの法律に定め定めるところにより教育を行う」となっているので、要するに、法に書いてあることに従って教育ををすることが教育行政の責任になっていて、教育の目的には「道徳心」とか「愛国心」とか、そういうのが含まれて、それを決まっている通りにやることが教育行政だとされたので、かなり教育内容に口出しができるというか、内容を決めていくことに、新しい教育基本法はなってきたるんやなって。僕自身は、紙に書いてあることが変わっても、僕たちが目の前の子どもたちにきちんと向き合ったら別になんちゅうことはないって、その時はそんな気持ちで言ってたんですけども、気がついたらそうじゃないねんな、そういうものにどう書かれているかっていうのはすごい大きなことやねんなって、改めて感じています。

教育振興基本計画が出てきて、それに相まって PDCA (Plan→Do→Check→Action) が僕らの周りでも言われて、それに合わせて組織をマネジメントしていくのが管理職の仕事やということで、数値目標があって、いつまでに何をやるかと、途中で必ず中間査定をして、ダメなどこ

ろを変えて、最終的にどんなことができたか、できへんかったかっていう報告を出さなあかんようになって、それに基づいて次年度の予算だとかいろんなことが配分されていくことになって。子どもを目の前にして子どもの状況から教育をどうしていこうかではなく、そこに書かれたものにどれだけ成果を収めたかっていう、数字に対して何ができたかっていうことで学校教育が評価されていく流れにどんどん絡め取られていって。

例えば、テストをやって、できないよりできた方がいいとか、なんでも子どもはできるようになったら喜びやから、その喜びを増やせばそれが自尊心につながるとか、まあ一部はそうなんでしょうけども、そうでないところがどんどん忘れ去られて、毎日一緒に生活していることの、いいことも悪いことも含めて、トラブルがあってもそこから学ぶことがあって、子どもたちは実際にリアルにいろいろぶつかり合ったりしている中から数値化できないようなことをたくさん学んでいたはずやし、僕らもそういう子どもの姿から教育を学んでいたはずなのに、いつしか教育振興基本計画をどう実現して行くかっていうことにはばかりすごく目を向けさせられて、教育振興基本計画に則って何か成果を出したところは素晴らしい教育をしていますよってというような、そんなところに引っ張られていったなあっていうふうに思っています。

3-4 子どもが本音を出せない、おとなも話を聴けない

結局、教育振興基本計画なんていうのは、おとなが考える子どもの幸せで、おとなが決めたゴールにどう向かっていくか。本当に子どもの思いや願いを聴いたり、子どもたちもそんなことが言えてるのかって、もう言えてないし、言う気さえないみたい。自分の無力感をすごく感じている子どもたちが増えたなあっていうふうに思います。低学年、1年、2年の時はそこまで思わないんですけども、だんだん学年が上がってくるにしたがって、5年、6年で、いろいろ物事をしっかり考える子たちが、逆に言ったら無力感にどんどん襲われていくみたいな、「どうせこんなやっただって」みたいなこととか、「もう私いいねん」とかね、「頑張ってるやん」とか褒めてもそれがもう心に響いていけへんっていうか、その先が見えてしまっているみたいな子たちもいて。それすら言えない、先生にはもちろん——先生怖いし、やっぱり先生は権力者ですから——先生には言えない、お家の人にもやっぱり言えない、友だちにも言えない、そういう意味で本当の思いを言えない子がすごく増えていったなあっていうふうに思っています。

子どもの権利条約も、知らないわけじゃないんです。でもちゃんと読み込めてないし、保護しているつもりが、気づいたら管理をしているっていうことに置き換わったり、何かを提供する、支援するっていても、それは強制的に、「これはあなたのためだからやりなさい」みたいなこととか、参加をしているように見せかけて、実は「やらせ」になってるとか。僕もどんどん時間がなくなってきた、児童会の担当とかしてたんですけども、小学校でも児童会とか自治的な活動は大事だと思うんですけど、やっぱりそれをやってる時間がない。まだ(受け持ちの)学級ならいいんですけども、他の学級からもいろいろ聞いてくる子たち、放課後にその時間がない。今までだったら自分らで考えてやってみて、失敗してもある程度、じゃあ次こうしようっていうふうにアドバイスができてたのが、その時間がないから、僕の方が、「はい、もうこれで行きましょう」って言う

て、司会の言葉でも雛形を作って、「はいこれでやってね」って、今までやったら自分たちで司会の言葉を作らせて、「これどう?」とか「この通りでみんな分かってくれるかな?」と言うて、もういっぺん返して考え直してもらう時間があつたはずなのに、そういうことをしなくなった。でも見た目には子どもたちが司会をしているので、自主的な運営をしているっていうふうに見えるんやけども、実際にはやらせてるみたい。今、多くの小学校がそんな実態になってるんちゃうかなって思ったりします。

4. 「提言書」に込めた思い——教育の本質をあらためて考える

4-1 おとなが「子どもの権利」を学びなおそう

最初にも言いましたように、オンライン授業のことだけじゃなくて、やっぱり僕たちが子どもたちを本当に学びの主体としてちゃんと見ているのか、見てきたのかっていうことをね、教育政策自体がそうになってないし、その中で僕たちが思考停止して、仕方がないなっていうふうにやってきたんじゃないか、そこを問いたいという思いがありました。

やっぱり、子どもの権利条約、これがすごく大事やなって。まずはおとなである僕たちが学ばなあかんって。教職員も本当にこのことをもういっぺんしっかり考えなあかん。「子どもの最善の利益」って言った時に、一応考えてるんですけど、おとなの考える「最善の利益」であつたり、結局、それを突き詰めていったら、おとなにとって都合が良いってということなんですよね。どっか、「子どものためや」って言いながら。

子どもが権利の主体であるっていうことを子どもたちに伝えていかなあかんのですけれども、参加するっていうことが、子どもたちにもその体験がないし、今の若い先生たちがまさしく自分たちもそういうふうにしてきて、そのことによってある意味評価されて、今、教育現場にいるっていうところがあると思うんです。決して勉強できなかったわけじゃない人たちでしょうし、学校に上手に適応してた人たちやと思うので、そこで言うともう僕らの意識が変わらないとだめで、その辺がかなり難しい。

一足飛びに何かパツと変わるようなことはないと思うんですけど、本当はこういう会でも、もっと若い人を僕もちゃんと呼べたりとか、昔は教職員組合がその核になってたんですけど、完全に組合が潰されてしまって、若い人たちをしっかりと、教育への問いかけみたいなことで、一緒に考えようというところで結集できてない。これをどうしていくかは大事なことやなあって思っています。たぶん今までの労働組合みたいな形では政治的なイデオロギーも入ってきてしまって無理だと思うので、違う視点でもう一回先生たちが連帯するような、そういうものが必要かなって思っています。

4-2 一人ひとりが「ちがう」存在であり、関わり合いの中で生きている

大田堯さんという、宮城教育大の学長をされたりした方で、もう亡くなられましたけども、「いのち」っていう側面から基本的人権を考えるっていうことをおっしゃって、手元の本の中に書いてあった言葉そのままなんですけど、「一人一人「ちがう」存在である」っていうこと。これを子どもたちも先生たちも、まず持ってほしいなあって。「ちがう」から良いとか悪いとかそういうことじゃなくて、もうみんな「ちがう」んだ、一人ひとりが「ちがう」んだっていうこと。一緒に同じことをできることが良いことでもなく、まあでも、みんながええって言うんであれば同じこと一緒にやればいいし、自分はこうしたいねっていうことがあったらそれはそれでお互いがいいねって認め合えるみたいな、みんなもともと「ちがう」んやと、そこをしっかりと心に留めたいなと思っています。

それから、関わり合いの中で生きている。やっぱり一人で生きているわけじゃなくていろんな関わりがあって、リアルに友達とか家族とかもそうでしょうし、僕らが食べるっていうことにしても、野菜や肉を作ってくれてる人がいて、それを運んでくれる人もいて、自分で意識するしないにかかわらず、すごいたくさんの人とかかわりあって生きてるんだっていう、そういう関わりを大事にしようっていうこと。

4-3 子どもは自ら変わる力を持っている

それから、これが一番大事なことなんやろうと思うんですけども、自ら変わる力を持っている。みんな変わる力を持ってるんやと。教師はやっぱりどうしてもね、変えなあかんとか、良くしてあげようとかね、そういう意識がすごい強いんですよ。なおかつ今みたいに評価があって、単年度で何か成果を求められると、自分が担任している間に何か成果として変わったものとかを求めてしまったりとか。みんな善意ではあるんですけども、一生懸命やってるんですけども、やっぱり子どもの中に変わる力があるんだと。誰にも内側に力があるんだと。ただ誰にも、どこまで能力があるかっていうのは分からない、限界がどこかっていうのは分からないので、力があるっていうことを信じるっていうこと。

これはたぶん、「エンパワーメント」の考え方につながっていくと思うんですけども、要するに、その人自身が力を持っていて、自分で決めて、進んでいくことができるんやって。もうそれを信じるしか僕はないと思っています。それができてはじめて、子ども自ら参加していくということにつながっていくんだと思うんですけども、今の学校教育では一番できてないところやなと思います。みんな力がないところが前提になって、特に学年が下やったら、小さい子たちはこれができないからできるようにしてあげる、できないところに、できるようにする何かを僕らが注入していくみたいな、そういう視点になっていると思います。たくさんそれを受け入れられて、受け止めた子が頑張った子、こういうことができる子みたいな、そういう発想も変えなあかんっていうふうに思っています。

パウロ・フレイレ(20世紀ブラジルの教育思想家・識字教育実践者)が「銀行型教育」と批判していた、貯金するように子どもの中に知識をため込んでいく、それが教員の仕事みたいに

思ったらあかん。この間、「提言書」を出したことでいろんなお手紙とか電話とかくれはるんですけども、「高知の元気なおばあちゃん」と名乗る人から電話もらって、「もう今の教育は1升枧に2升詰め込もうとしているようなもんやから、あんなの溢れるの当然で、あんなしたったら子どもがかわいそうや」ってすごい言っってはって、うまいこと言わはるなあと思いました。最後に、僕がピンチになったらぜひ私に言ってくれと、「高知は自由民権運動発祥の地やから先生の身分が危うくなったら助けに行きますよ」って言ってくれたんで、すごい嬉しいなあって思いました。

4-4 CANではなくBEで——そこにいること自体に意味がある

一人ひとり「ちがう」存在である。関わり合いの中で生きている。それから、自ら変わる力を持っている。これがみんなで共有できたら、僕はこれが「セルフエスティーム」とか「レジリエンス」、少々のことは跳ね返す、柔軟な力につながっていくんじゃないかなと思っています。何かができるとか、何かをしたとか、業績があったとか、そういうことじゃなくて、存在、そこにいてるっていうこと、そのことを本当に大事にしたいなって。物差しで人と比べてどうやっていうんじゃない。僕もそんな子どもでしたし、その時にやっぱり、自分はあるより好きじゃなかったです。いつも自信がなくて、スポーツも勉強もそれなりにできるかもと思っているけど、いつ自分が下に落ちてしまうかもしれへん、で、そうなった時の怖さみたいなこととか、常にそんなことに怯えてて、本当の意味での自信がない子どもやったなあっていうふうに思っています。

できないことができるようになるっていうことは、嬉しいことでもありますけれども、でもそれだけがすべてじゃないですし、ある意味、そんなことってほんのちよっとのことかもしれない。そこにいてるっていうこと、一人ひとりがそこにいてるってことには、本当に、それぞれに大切な意味があって、できないからだめやとかそんなふうには思わせない世の中にしたいなって。そうでないと、障害のある子どもたちは、できないことが多いわけですから、そうしたら、その子たちにとっての存在の意味がどうなのかって。

啓発小学校に行って原学級保障に取り組んだ時に、僕もそういう意味で、障害のある子は大変や、できないことが多いから、やっぱりみんな助けてあげなあかんでって、僕はそんな気持ちだったんですよ。で、みんなも僕がそう言うからそんなふうにして、朝は集団登校で来れるんですけど、帰りは集団下校じゃないので、クラスの子たちが一緒に連れて帰ろうという取り組みをしてたんです。はじめのうちはみんな喜んで帰ってたんですけど、そのうちどんどん、自分は遊びたいし、その子と帰る子が減ってきて、ほとんどしゃべらない内気な女の子2人がいつも帰ってたんです。僕はそれが気になって、誰かが「あかんやろー」とか言うかなとか思ったけど、言えへんから、僕が思わず「これあかんのちゃうか」みたいなことを言ったんですよ。ほんなら子どもも「みんなで一緒に下校しようって言ったのに」って言って、当番活動にしようかとか、そんな意見も学級会で出てきたんです。なかには、「習い事してるからそんな勝手に当番決められても」っていう子もいて、そしたらみんながその子に「お前そんな自分のことしか考えてへんやんか」みたいなことを言って、僕もそうだそうだと思ってたんですけど、Tくんと一緒に帰っている2人が、授業中も手を挙げてしゃべるような子じゃないんですけど、「もうこの話はやめ

てください」「なんか T くんをモノ扱いしてます」って。「私は全然 T ちゃんと帰るの嫌なんじゃないんです」「毎日楽しいんです」「押し付けられて帰っているわけでもないから、そういう話やめてください」って言われた時に、僕の中で T くんはかわいそうな子で、面倒みてあげなあかん子でって、差別してるのは僕やなってすごい気づかされて。

実は T くんは綺麗好きで、学校の中でもちょっとゴミがあったらどこかからほうきを持ってきて掃いてるような子なんですよね。靴がバラバラに並んでるのもすごく気になって、帰る途中でどっかの家の玄関空いてて、靴がバラバラやったそこの家まで入っていて靴を並べ直すらしいんですよ。そんなんで、ヒヤヒヤしながらも、でも「そんなことできる人いてへん」っていう、彼のすごさみたいのを、その子たちはすごく感じていて、いっぱいいろんなことを気づかせてくれると。その時にやっぱり、ああ、僕自身が障害をもっている人を差別してきた、自分が一緒に暮らしてきた経験もなくてっていうところで、そんなことを今も思い出しています。

他にもいろいろ、子どもたちから言われてたくさん学んだことがあって、一人ひとりその場に来てくれて、みんなお互い関わり合っって、その中で、何かができるとか勉強できるとかスポーツができるとかそんなことだけじゃなくて、いろんなところで必ず影響し合っってっていうか、学び合ってる。それにみんながもっと気づけたらいいなと思うんですけど、ただ、世の中の回り方が早すぎて、経済一辺倒で、その価値観で進んでいくから、そういうところはなかなか見えにくい世の中になってるなって。せめて小学校ではそこまであくせくしないでいいので、僕はもっとほんまにそこをちゃんと見れるようにしないといけないなと思っています。ただ、中学校の先生からよく言われたのが、中学校は受験っていう出口がある、小学校の先生はそれがないからいつまでもボケボケしてるとか言われるんですけども、僕は小学校ぐらい、パラダイスというか、牧歌的で、のほほんと暮らせてもいいのかなって、正直そんなふうにも思ったりもしています。

4-5 「生き抜く」社会ではなく「生き合う」社会に

僕が『ヒューマンライツ』に漫画を書いていると紹介してもらったと思うんですけども、2017 年 10 月号に、「生き抜く」力ではなく、「生き合う」力が必要なんちゃうかみたいなことを書いていて、もう 7 年前ぐらいにそんなこと思ってたんやなど。

「競争」と「切磋琢磨」は違うと思ってるんですよね。「生き合う」なかでも「切磋琢磨」できるし、共に高め合っっていくことはあると思うんです。今、「切磋琢磨」っていう言葉で政治家の人が言うてるけれども、「競争」はもう行き過ぎてて、僕は暴走していると思います。欲望が暴走していて、やっぱり「生き合う」っていう気持ちにならないと、この暴走は止められへんやろうなって思っています。これは教育だけでどうのこうのっていうことじゃないと思うんですけども、「生き合う」社会に本当にしていきたいなって。今回、自分が声を上げたのも、その当事者として、自分はちゃんと思ったことをきっちり言って、その責任は取っていかなあかんと思っています。

4-6 教員が子どもと向き合う喜びを感じられる職場に

本当に、先生たちは皆さん真面目です。本当に一生懸命やっています。若い先生たちも、わからない中でも、やっぱり子どもたちが笑顔になってくれたらそれが嬉しいという気持ちもあります。ただ、それが実感しにくいぐらい、いろいろ忙しかったり、ほかの仕事があったり、気がついたら子どもを見ずにデータばかり見て、それでもって自分の仕事が評価されていくみたいな思い違いになってしまっている。子どもに対して何ができて、子どもがどんな反応を直接返してくれるか、そのことがリアルに実感できたとしたら、たぶん先生たちはもっとやりがいも感じていくやろうし、自分の仕事にもっともっと主体的にポジティブに、管理職に言われてやるとかじゃなく、自分たちの発想でいろいろできていくんじゃないかなっていうふうに思っています。

特に管理職が一番危ないというか、教育委員会に向けて仕事しているような態度にどんどんなっていってしまうので、自分たちの喜びをリアルに子どもたちの反応から感じられる、そんな職場に僕自身はしていきたいと思っています。

おわりに——主権者としての自己解放と連帯を求めて

子どもたちは本質的には変わっていないって言いましたように、これはもう子どもの問題じゃなくて、社会構造の問題であるとか、社会を覆う価値観の問題。つまり僕たちが自分たちの問題として、この社会をつくっているのは主権者である自分たちやとか、教育っていうのは僕たちの共有財産としてみんなで作っていくものとしてみんなで考えていかないとだめやろうなあっていうふうに、僕自身が、政治任せとか時代の流れって、漠然と何を指してるのか、時代の流れも政治も、作ってるのは自分のはずなのに、どっか違うところで動いてるみたいな感覚で言ってるところが反省すべきところかなって思っています。

今、本当に大切に思うことは、教職員が自己解放していくこと。僕も啓発小学校に行ったからこそ、自分のそれまでの価値観とかを崩していくことができて、新たな価値観でもって自分自身を解放していったと思っているので、教職員も自己解放して欲しいと思います。それと、思考停止しないように。思考停止した方が楽なんです。はっきり言って。そういう時代やからしゃあないとか言っていると罪の意識も軽くなってしまうんですけど、やっぱり思考停止したらあかんって。やっぱり常に考えつづけて、問い続ける。ちょっとでも一緒に問い続ける仲間を増やしていくっていうことが、今、大事やなって思っています。

今回、大阪以外の方からもたくさんお便りいただいたので、どこも同じような課題があって、教育はこれでいいのかなって思っておられる方が少なからず全国におられるっていうのがわかったので、そんな方と少しでもつながっていきたり、それぞれの方が自分の身近でこういう話をいろいろしていただいて、そういう動きがあっちこっちで起こってまたつながっていったらいいなって思っています。僕自身も、さっき「時の人になった」とか言われてしまいましたけども、「時の

人」で終わったらあかん、地道に僕自身の問題として、理不尽なことに対して毅然とした態度でいないといけないなと、そういう姿を、声をあげた以上、子どもたちにもしっかり見せないといけないなと思っています。

■ 質疑応答

1. 久保さんが職場の中で、校内での先生同士の連帯・協働・仲間関係を育んでいくために心がけていること、先生方に働きかけておられることはあるのでしょうか。また、職場の枠を超えてもっと広い観点で、いろいろな地域、いろいろな立場の先生同士が連帯していけるような場やネットワークをどう作っていけばよいのでしょうか。

[久保]

できるだけ僕は自分の失敗談とか、若い先生にはいろいろ話するようにはしています。「どうしたらいいですか」って聞いてこられる方もいるんですけども、「それは自分で考えることや」みたいに言うてるんですけども、そのヒントになる自分の失敗談ですね。

校長になってから、前任校でもやってたんですけど、僕から先生宛ての通信を月に2回ぐらい、『ガッツ通信』って名前で発行していて、先生方のいろいろな取り組みで、僕が見ていて「これいいな」って思うことをその通信でほめるようにしてます。あとは、「子どもの権利条約」についての情報提供をしたり、その通信は一つ大きなものかなど。皆さんだんだんよく読んでくれるようになって、書いてあったことについて質問してくれる人も出てきているので、先生同士を結びつけたり、僕と教職員の皆さんとの関係を良くするのには役に立っているかなと思っています。

校内研修も、あまり増やすと負担が大きくなるんですけども、皆さんがどんなことを知りたいかということも含めて、教育センターでは実施していないような内容の研修をできるだけやりたいと思っています。僕自身の人とのつながりもあるので、今年の夏休みには「メディア・リテラシー」のテーマで西村寿子さん(NPO 法人 FCT メディア・リテラシー研究所)に来てもらいます。そういう教科書はないと言われるけど、僕らの狭い世界じゃない、多様な視点で見るというのはすごく大事だと思うし、気づくことがいっぱいあると思ってやっていますね。今年はもう一つ、生活綴方の研修をしようかなと思っています。今の国語の教科書で、作文を書くときの取り扱い方がすごくテクニク的なことになっていたり、パターン化した作文教育になっているので、綴ることの意味、生活の中に何かを見つけるために書く、生きていく力につながるような書くという営みについて、知ってほしいなあと思っています。

それから、これも大事だなと思っているのは、やっぱり歴史を知らない。僕の核になっているのは、やっぱり最初の同和教育推進校での8年間で、先輩たちから「靴減らしの教育」であるとか、「今日も机にあの子がいない」という実態からやってきた実践の話をたくさん聞いたし、「非行は宝」といわれる、僕が赴任する20年ぐらい前の地域での子どもとの格闘であるとか、その中で子どもたちが非行から立ち上がっていく、教師もそのことによっていろんなことに気づいていく。そんな話を聞いて衝撃も受けて、差別の実態とか、いろんな話を聞いてきたことはすごい大きいと思っているんですね。例えば、教科書がなぜ無償になったかということすら、若い人はほとんど知らない。第二次世界大戦も「アメリカと戦争してたんですかね？」ぐらいの認識の人がい

っばいいてるんですよ。やっぱり、その知識が、受験を乗り越えるために覚えることとしての歴史やってみたくな。僕も実際、自分がそうやったんです。沖縄戦のことでも、最初に啓発小学校に赴任してなかったら、いつ何があったかぐらいは知っていても、そこでいったい日本軍が何をしたのかとか、原爆のことだって、たくさんの方が死にました、8月6日広島、8月9日長崎って、そういう知識のただの羅列でしかなかった自分がやっぱりいるので、よく考えれば自分もそうやなって。僕はそれでも1961年生まれて、戦後10年後の生まれて、まだ身近にあったけど、今の人たちはこっち側からちゃんと言わないと分からへんと。大阪の同和教育の歴史も、ちゃんと伝えなあかんって、すごい今、思ってます。

去年、同和教育の歴史について1回話をしたんですよ。ほとんど誰も、中堅どころの先生でも知らないということがわかりました。40代ぐらいの人でも、同和教育推進校すら何のことかわからへんし、読本『にんげん』も15年以上前になくなって、「小学校の時それ習いました」「その本覚えてます」「表紙ちょっと怖かったです」とか言う先生もいましたけど、ぜんぜん見たこともない人たちがたくさんいるっていうことに、僕も気づいてなかった。例えば、障害のある人たちが就学猶予・免除といわれて学校教育から排除されている中で、啓発小学校などでは、地元の学校で受け入れようという取り組みがあって、それは同和教育が元になっている。そこに引っ越してきてまでも、啓発小学校や西淡路小学校、中島中学校や淡路中学校に通ってた人たちがいたこととか。そういう中で、大阪市では、今はどの学校にも特別支援学級があって、私の学校では授業はだいたい原学級への入り込みを行っています。特別支援学級の担任配置は、文科省は8人に1人、大阪市は6人に1人という基準になっていますけれども、それでは原学級への入り込みなんてできないので、支援員さん（教員免許を必要としない学習及び学校生活の補助者）の制度を使いながらやっている学校が多分少ないと思うんです。大阪では、特別支援学級だけで授業をしている学校よりも、原学級への入り込みをやっている学校の方が多いいんじゃないかなと思うんですけれども、他の地域に行くと全然そうじゃないんですよ。他府県なんかもう完全に「障害」の度合いで分けられてるっていうのを聞くと、大阪は一緒にやっという、インクルーシブ教育の理念はあると思うんですけども。

ちょっと答えがずれてしまっって変な方向に行っちゃいましたけども、職場の中では、先生たちも雑談する時間みたいなが必要やなと思っって、自分の生活のこととかをちょっと自己開示して言えるような、くつろいだ時間は作りたいなと思っっています。今、一人一回、研究授業をせなあかんのので、それをホンマに完璧にこなそうと思ったら大変なことになってしまう。研究授業をやるとなると、すごいイメージがあっって、すごい指導案書かなあかんってなるんですけども、僕はそんなに労力かけなくても略案でええんちゃうと、討議会のときも、その日の指導とか、この時の板書がどうかそんな細かなことは言ってもしゃあないから、もっと違う視点で話しましよと。できたら5分~10分余らせて、自分が子どもやったときのことをちょっと話し合っとかね。子どものとき、自分はこんなことが嫌やったとか、こんなことで先生にほめられてめっちゃ嬉しかったとかね、雑談によって自己開示し合えるようなそんな時間が、いい教職員集団を作っってくれると思っっています。

今回の僕のこと、それぞれの学校でもういっぺんみんな連帯していかんあかと、もういっ

ぺん教職員組合が息吹き返して、よーし、俺らが核になったろうと思ってやってくれはるんやったらそれでもいいんですけど、今は労働条件で何かを獲得するっていうようなところでは若い先生にとってはあまり魅力がないと思うんですよね。自分たちの働きやすさとか、教育のやりがいて何なのかとか、子どもたちの成長ってどういうことで、それに僕らがどう関わっていくのかということについて、教育委員会にその視点が抜けてるんやったら、自分たち当事者が、これでは自分のやりがいもないとか、働き方改革ってただ単に勤務時間を少なくしてくれっていうことじゃ僕はないと思うんですよ、先生方の意識も。でも単に時間を減らせ、ばっかりになっていって、時間外勤務を少なくしてとか、そこばっかりに目が行っているんですけども、そうじゃないみたいなどころもあるし。皆さんがもし僕が書いたことに共感してくれはるんやったら、みんなもそう思ってるって職場会議でもやって、それぞれの学校でやってほしい、そんなところから新たなつながりができていったらいいと思っています。

2. 「雑談ができる」「自己開示できる場づくり」ということと関連して、子どもたちが学校の中で一息つけるような場、教室以外の居場所づくりのような観点で取り組んでおられることはあるでしょうか。

[久保]

保健室もそうでしょうし、特別支援学級の部屋もそういう場所になるでしょうし、図書室も、うちの学校では週に一日だけ、図書館補助員っていう有償ボランティアの方が来てくれてはって、その日は一日中いつ行ってもいいことにしているので、そこへ逃げ込んで行っている子もいるでしょうし、今なら校長室もそういう場になっています。僕がなぞなぞとか早口言葉とか、週に一回ぐらいお題を出して、それができたら答えを言いに来たりしてるんですけど、そのついでに入ってくる。たぶん校長室って入ったらあかんところとか、みんな思ってたんでしょけど、今は入ってもええところや、ぐらいいに思ってるので。

例えば保健室でも、担任の先生が、子どもが行くと嫌がる人がおったりしますよね。「いつも保健室に行って…」とか、「保健の先生がちゃんと言ってくれへんからなかなか帰ってこない」とかね。やっぱり、教員同士が風通し良くいろいろ話ができていて、一人ひとりの子どもたちのことがわかっていれば、そういうところはだいたい解消できると思うので、うちの学校は全校生徒 140人ぐらいで人数が少ないので、月一回の職員会議の後、必ず子どもたちの情報交換会をしています。そうすると、ある程度いろんな子どもたちの状況が分かるので、保健室にちょっとこの子が長居してもいいかなとか、担任ではケアできない部分が保健室ではできるとか、先生も助け合える。なんでも担任がせなあかんとか思ってる人が多くて、保健室に行って愚痴を言わせてるっていうことが担任としてできてないと思われたりするんちゃうかとかいう思いがあったりもするから、そこはさっきの「雑談」「自己開示」と一緒に、できないこともみんなあって、誰かに「助けて」ということは悪いことじゃない、子どももそうやし、僕らもそうや、みたいなどころを、皆さんがわかってもらえたらと思っています。それに一番いいのは、僕が今まで重ねてきた失敗談

を言うのが一番効果があると(笑)。僕もそういう思い込みの中で自分が失敗してきたことがあるので、決してそうじゃないですよ、みたいなことを言うのが一番かなというふうに思います。

なぞなぞとか、早口言葉とかやると、子どもの中にもね、「これやって何になるんですか?」「これで頭が良くなるのか?」「校長先生は何かの効果を狙ってやってるんですか?」って言う子もいたりするんですね。さっきの経済至上主義じゃないですけど、「これやったら何かくれるんですか?」とかいうのもあったりしますが、別に何にもなくて、これができたからって何もなければ、面白かったら付き合っ、しょうもないと思ったら関わらんとってくれたら別にいいし、とかいう感じで。「なぞなぞの答え言いに来ました」って言って来て、その後、なんか校長室に居りたそうやから、入っていいよって言ったら、「校長室の椅子はいいですね」って5分間ぐらい座って、「ありがとうございます」って帰って行ったりするから、何も聞かなくても、きっとそれだけでも、その子はそれで何か自分で踏ん切りつけていけたんやったらいいので。根掘り葉掘り聞きたくなったりするんですけども、ホンマになんか困ってるんやったら言ってくれるやろうし、とりあえずちょっと休憩して、それで自分で整理付けて行ってくれる子もいるから、図書室であったり保健室であったり校長室であったり、特別支援学級がそういう場になって、あ、そういうところなんやって、その場を管理している教職員がそう思ってくれたらなと思います。

あと、管理作業員さんもそういう意味ではうちの学校ではクッションになってくれてて、勉強はしんどいけど、ネジ回させてほしいとか言って、ネジ回したら、「お、うまいやんか」とか言われて、そういうので今日学校来て楽しかったなということもあるかもしれないし、学習も単に狭い意味での学習、教科の勉強とかいうことじゃないところで、子どもたちが面白味とか、価値があるとかないとか度外視して、なんでも価値がある、なんでも価値がないかもしれへんみたいな、そんなところだと思うんですけども。

3. 小規模校ではアットホームな形を作りやすい条件もあると思いますが、大阪市内でも、人口規模も違えば、住民の所得階層の違いも、遊び環境でもボールを使っている公園がいっぱいある所もあれば、ボールを使えないような公園しかないという環境の違いもある。その中で子どもたちの生活、遊び、育ちにおける格差であったり、取り組みのしづらさのようなものが変わってくることはあるのでしょうか。

[久保]

やっぱり地域が違えば子どもたちも保護者も違いますし、そういう意味では地域のことをどれだけ知れるかがすごく大事やと思うんです。最初の赴任先で、地域にもっと足を運ばなあかんで、家庭訪問大事やで、「告げ口訪問」が一番アカんで、とかね。日頃の子どもたちの生活を知ることが大事やで、って言われて。でも、忙しくなってきたなかそれが難しくなってると思うんですよ。いつしか、地域に出向くのは管理職の仕事みたいなことになってしまっ、なかなか平場の先生たちがいろんな活動に積極的に行くのが難しくなっ、僕らも頼みにくくなっ、金曜日まで大変やのに土・日まで地域の行事あるから行ってください、とか言いにくい。

でも、職場がそれなりにみんなが支え合っているって雰囲気があって、やっぱり子どもたちにとって何ができるかっていうところに目がいき出すと、地域で子どもたちが今日何かやるって、子どもらも先生にちゃんと言うんですね。今日お祭りで太鼓をやるから見に来てほしいとか、ソフトボールやキックベースボールの大会があるとか、やっぱり子どもに言われたら、先生たちもちょっとでも顔出そうかなっていうことになったりするし。行けなかったとしても、地域の人たちのことをどれだけ意識できているかはすごい大事なことで、おかげさまで今の学校は皆さん、地域といろいろ取り組んでいる行事が昔からあって、それはホンマに大変ですけども、それを一緒にやることによって、地域の人自分たちを信頼して任せてくれるということがわかる。決して地域の行事のために僕らがお手伝いしているってということじゃなくて、これは回り回って自分たちの教育にとってすごくプラスになってるんじゃないかという話はしていて、皆さんもちょっと今実感してくれてはるんじゃないかなって思ったりします。

でも、それがやりにくいくらい仕事が詰んでいるというのと、プライバシーがすごく言われるようになって、地域の家庭の状況に首を突っ込みすぎるのは失礼なことみたいな、そんな雰囲気もなきにしもあらずやなと思うんです。だから、地域との関わりがやっぱり希薄になっているし、地域の中もコミュニティが壊れていっているというのがあるので、余計にそのことがボディーブローのように子どもたちにも跳ね返っているという気はしています。

■主催者コメント

[渡邊]

お話聞いてて思ったんですよ。「生き合う」って絵空事じゃなくてね、人が集まってそこで暮らしていたら、事実として生まれるもんなんやって。相手のことをちょっと信頼できたりすると、いろんな話を自然としたくなったりする。気持ちが開かれてくれば、子どもたちも学校の中の出来事以外でも、自分が信頼できる人にはいろんな話をむしろしたくなるわけであって、それができなくなっていってしまっている状況がどうして生まれるんやっていうところを、やっぱり考えていかなきゃいけないんじゃないか。

親御さんでも、勉強ちゃんとやらさないと学力が心配やって話になるときに、学力がなかったらやっていかれへんんじゃないかと思わされてしまっている状況自体がまずいんじゃないか。そういう状況がどうして生まれてくるのかというところが、社会構造の問題とか社会の価値観の問題にダイレクトにつながってくるし、学校でどれだけ楽しく過ごせる環境を作ろうとしても、おとなの暮らしそのものに「遊び」であったり、一息つけるような余白の部分がなければ、子どもたちにそれがいいよって、おとなが自信を持って言えないっていうかね。そこをやっぱり見直していかないといけないだろうっていうふうな、久保さんのお話を聞きながら改めて考えさせられました。

学校を変えるには、学校のことだけ考えててもダメで、子どもと一緒に生きているおとな自身がどうやって楽しく生きていけるんやろうって、いろんな生き方できるんやで、みたいなところを実際に示していけるのかっていうところを、引き続き、考えていけたらいいなと思いました。

(おわり)

■参加者の声（アンケートの自由記述より抜粋）

<p>オンライン学習のように新たな問題があるが、基本は子ども(や保護者)との直接的な繋がりを大切にする事と思います。久保さんのお話を聴いて現場で頑張っている先生方を応援したい、私に出来ることは何かを考えています。</p>
<p>大阪と東京、場所は違いますが、子ども達のおかれている環境、それは先生方が管理下におかれていることからきていることは、同じなのだと思います。大人が解放されあうこと、大切です。明日も学校に行ってみます。</p>
<p>久保さんの一連の動きは、「解放教育の再構築」の貴重なきっかけにさせていただけると確信し、この1か月、鳥取県内を中心に、かなりの情報を拡散してきました。他の情報と比べ、かなりの反響があり、現職の教職員や保護者からもいい反応を得ています。今日の学びを新たな一歩として、取り組みを進めていこう、進めていきたい、と決意を新たにできる時間でした。子どもたちとしっかりつながりながら、すべての子どもたちが（そして大人たちが）、幸せに生きられる世の中にしていくために、願生りたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。</p>
<p>まず、先生方が「子どもの権利」を学ぶのが大切だと思いました。</p>
<p>子どもが権利の主体に…子どもにやさしいまちづくりを 市政に反映していきたい</p>
<p>あらためて子どもの権利について内容を理解し、これまで当たり前と思っていたことをひっくり返す必要がある。おかしいと思うことに声を上げること。</p>
<p>学校現場で、子どもと考える時間がなく、お膳立てしてしまっている状況であるという現状。 保育現場は、子どもと生活を創る場なのだから、当たり前でできている？ どうなんだろうと、考え込んでしまいました。子ども参加、意見表明、簡単に捉えることはできませんが、できることから、仲間とともに話してみたいと思いました。</p>
<p>久保校長の話で教育現場の実態がよくわかり、勉強になりました。現役の保護者でないと、教育現場の実態はよく見えないので、実態を知らせるだけでも大きな価値があると思いました。</p>
<p>地域間格差、家庭間格差などなど、少しでも埋めたいと思います。</p>
<p>子どもを大切にする事が最優先で、そのために大人が教育の現場をもっと知る必要がやはりあると痛感しました。個人的に、友人と二文字先生訳の絵本「あなたへ」を使った親子向けのW.S を開催したりしてますが、いろんなことみんなと議論できるような機会を持ちたいと思いました。先生が楽しくない学校なんて、子どもも楽しくない。まず、先生の忙しすぎるのをなんとかしたいです。作戦ねります。</p>

<p>学校現場こそ子どもが日常のなかで「子どもの権利」を学ぶ場であると思います。その学校現場で毎日勤務されているおとなのみなさんが自分の権利と子どもの権利を大切に出来ないような仕事をさせられているとしたら、問題だと思います。</p> <p>どの学校にも「権利」に詳しいオンブズの存在が必要だと思います。</p>
<p>子ども自身が自分の権利を知るための人権学習が、大変不足していると感じます。</p>
<p>久保先生のおっしゃったように、大人の思いや都合で計画を立てるのでなく、学びの主体として子どもが力を発揮できるような環境や場を作ることが大事だと改めて気づきました。時間や余裕がないと、前者のような教育活動になってしまうと思いますので、意識して、時間や余裕を作り、心身ともに健康であることも意識し、出会う子どもや学生、同僚や家族が笑顔になれるような関わりを心がけたいと思います。</p>
<p>子どもたちと本音で話せる大人になりたい。</p> <p>やはり教師が変わらないとダメだと思います。</p> <p>行政とのやり取りは腹が立つことばかりだけど、どうしたら相手にわかってもらえるようになるか考えていきたい。</p> <p>久保先生のような話が出来る様になりたい。</p>
<p>子どもを第一に考えていくことの大切さを、改めて考えることができました。競争ではなく、共有財産としての教育が、できるよう、自分の足元でやっていきたいです。全国の人と、交流したいと思います。</p>
<p>子どもの目線に立って一緒に学んでいきたいと思いました。</p>
<p>子どもの姿から学ぶという姿勢を忘れず、しっかり向き合うこと。じわじわ押し寄せる新自由主義化に使ってしまわないよう、自ら考え発信することをやめない。分断されている教職員の連帯し、地域とつながり子ども同士の関係をはぐくんでいきたい。</p> <p>「生き合う」こと「協働」の社会を今こそ大切にしなければならないと思った。</p>
<p>現在「訪問型家庭教育支援」の支援員として学校に行きづらい子どもやその保護者に出会っています。と同時にそれぞれのこどもの通う小学校とも関わりをもつようになり、学校や教員よっての対応の違いなどいろいろ感じる場所があります。</p> <p>私たちはできるだけ子どもの気持ちに沿って考え、登校を絶対とは考えていないことは教育委員会にも伝えてあります。一方で家庭が子どもにとって最善の居場所にはなっていないと思われるような事例にも出会っています。</p> <p>わずかな経験ではありますが、この4～5年で学校や教育委員会の側がずいぶん子どもたちの気持ちに寄り添う方向で様々な環境設定をされるようになったと感じています。久保先生のようなあたたかいまなざしでひとり一人の生徒を見てくださいる校長先生もいらっしゃいます。しん</p>

どい思いを抱えて毎日子どもと向きあっている親御さんの事情にも深い理解を示し、教育・福祉の連携や私たちのような市民団体の力も借りてネットワーク作りも少しずつ進んでいます。今はその末端で日々悩みながらお手伝いをしているところです。

久保先生のお話はそんな私にとっては心強いエールとなりました。

からだもアタマも子どもたちのエネルギーにだんだんについていけなくなっていますが、もう少し頑張ってみようと思えました。

子どもには権利があること、子どもには力があることを、学校現場（教師、子ども）が知る機会を持つことが必要と改めて思った。

久保さんの話を聞いて「生きあう」ってとってもいい言葉だな～と思いました。子どもも大人も一緒に生きていく。一人の人として対話しながら毎日を積み重ねていきたいと改めて思いました。

私たちは、重症心身障がい児と言われる子ども達の放課後等デイサービスを運営しています。「ひとりひとりを大切に」と思っていますが、結局のところ接し方に何かマニュアルがあるわけではなく、日々の子ども達との対話の中に子どもの主体や権利が存在していると感じます。

看護師や保育士、作業療法士といった有資格者の知識が専門性だと言われることも多いですが、むしろその専門性が邪魔になり、他職種間でコミュニケーションを図れなかったり、子ども不在になったりすることも多いため、大切なのは大人ひとりひとりの人生観、人間観なのではないかと改めて思いました。

子どもの権利が保障される学校とはどういうものかを学校の教職員全体で考えたい。

自身の失敗からの共感を得る、自身の解放、とりくんでいるつもりですが自分自身の始まりに戻っていかなくて感じるところです。

自分自身もまわりもまきこんで「子どもの権利」を考えていきたいと思いました。

大阪市長 松井一郎 様

大阪市教育行政への提言

豊かな学校文化を取り戻し、学び合う学校にするために

子どもたちが豊かな未来を幸せに生きていくために、公教育はどうあるべきか真剣に考える時が来ている。

学校は、グローバル経済を支える人材という「商品」を作り出す工場と化している。そこでは、子どもたちは、テストの点によって選別される「競争」に晒される。そして、教職員は、子どもの成長にかかわる教育の本質に根ざした働きができず、喜びのない何のためかわからないような仕事に追われ、疲弊していく。さらには、やりがいや使命感を奪われ、働くことへの意欲さえ失いつつある。

今、価値の転換を図らなければ、教育の世界に未来はないのではないかとの思いが胸をよぎる。持続可能な学校にするために、本当に大切なことだけを行う必要がある。特別な事業は要らない。学校の規模や状況に応じて均等に予算と人を分配すればよい。特別なことをやめれば、評価のための評価や、効果検証のための報告書やアンケートも必要なくなるはずだ。全国学力・学習状況調査も学力経年調査もその結果を分析した膨大な資料も要らない。それぞれの子どもたちが自ら「学び」に向かうためにどのような支援をすればいいかは、毎日、一緒に学習していればわかる話である。

現在の「運営に関する計画」も、学校協議会も手続き的なことに時間と労力がかかるばかりで、学校教育をよりよくしていくために、大きな効果をもたらすものではない。地域や保護者と共に教育を進めていくもっとよりよい形があるはずだ。目標管理シートによる人事評価制度も、教職員のやる気を喚起し、教育を活性化するものとしては機能していない。

また、コロナ禍により前倒しになった GIGA スクール構想に伴う一人一台端末の配備についても、通信環境の整備等十分に練られることないまま場当たりの計画で進められており、学校現場では今後の進展に危惧していた。3 回目の緊急事態宣言発出に伴って、大阪市長が全小中学校でオンライン授業を行うとしたことを発端に、そのお粗末な状況が露呈したわけだが、その結果、学校現場は混乱を極め、何より保護者や児童生徒に大きな負担がかかっている。結局、子どもの安全・安心も学ぶ権利もどちらも保障されない状況をつくり出していることに、胸をかきむしられる思いである。

つまり、本当に子どもの幸せな成長を願って、子どもの人権を尊重し「最善の利益」を考えた社会ではないことが、コロナ禍になってはっきりと可視化されてきたと言えるのではないだろうか。社会の課題のしわ寄せが、どんどん子どもや学校に襲いかかっている。虐待も不登校もいじめも増えるばかりである。10代の自殺も増えており、コロナ禍の現在、中高生の女子の自殺は急増している。これほどまでに、子どもたちを生き辛くさせているものは、何であるのか。私たち大人は、そのことに真剣に向き合わなければならない。グローバル化により激変する予測困難な社会を生き抜く力をつけなければならないと言うが、そんな社会自体が間違っているのではないのか。過度な競争を強いて、競争に打ち勝った者だけが「がんばった人間」として評価される、そんな理不尽な社会であっていいのか。誰もが幸せに生きる権利を持っており、社会は自由で公正・公平でなければならないはずだ。

「生き抜く」世の中ではなく、「生き合う」世の中でなくてはならない。そうでなければ、このコロナ禍にも、地球温暖化にも対応することができないにちがいない。世界の人々が連帯して、この地球規模の危機を乗り越えるために必要な力は、学力経年調査の平均点を1点あげることとは無関係である。全市共通目標が、いかに虚しく、わたしたちの教育への情熱を萎えさせるものか、想像していただきたい。

子どもたちと一緒に学んだり、遊んだりする時間を楽しみたい。子どもたちに直接かかわる仕事がしたいのだ。子どもたちに働きかけた結果は、数値による効果検証などではなく、子どもの反応として、直接肌で感じたいのだ。1点・2点を追い求めるのではなく、子どもたちの5年先、10年先を見据えて、今という時間を共に過ごしたいのだ。テストの点数というエビデンスはそれほど正しいものなのか。

あらゆるものを数値化して評価することで、人と人との信頼や信用をズタズタにし、温かなつながりを奪っただけではないのか。

間違いなく、教職員、学校は疲弊しているし、教育の質は低下している。誰もそんなことを望んではいないはずだ。誰もが一生懸命働き、人の役に立って、幸せな人生を送りたいと願っている。その当たり前の願いを育み、自己実現できるよう支援していくのが学校でなければならない。「競争」ではなく「協働」の社会でなければ、持続可能な社会にはならない。

コロナ禍の今、本当に子どもたちの安心・安全と学びをどのように保障していくかは、難しい問題である。オンライン学習などICT機器を使った学習も教育の手段としては有効なものであるだろう。しかし、それが子どもの「いのち」(人権)に光が当たっていなければ、結局は子どもたちをさらに追い詰め、苦しめることになるのではないだろうか。今回のオンライン授業に関する現場の混乱は、大人の都合による勝手な判断によるものである。

根本的な教育の在り方、いや政治や社会の在り方を見直し、子どもたちの未来に明るい光を見出したいと切に願うものである。これは、子どもの問題ではなく、まさしく大人の問題であり、政治的権力を持つ立場にある人にはその大きな責任が課せられているのではないだろうか。

令和 3(2021)年 5 月 17 日

大阪市立木川南小学校

校長 久保 敬